十中だより

令和３年５月７日
文責　奈加晃典

めざす生徒像
☆自ら進んで学び、考えて行動できる生徒(確かな学力)
☆勤労と責任を重んじ、礼儀正しく協力できる生徒(豊かな人間性)
☆自他の生命を尊重し、心身を鍛える生徒(健やかな体)

校 訓
自主　協働　剛健

エスカレーターを歩かない条例？

５月５日付毎日新聞に掲載された文章を読んで、世の中が変わっていく方向性に疑問を感じ、思ったことを書きたいと思います。
埼玉県が３月に「エスカレーターの安全な利用の促進に関する条例」を作り、「エスカレーターを利用する者は、立ち止まった状態で利用しなければならない」と定めました。
みなさんもエスカレーターに乗る場面はあると思いますが、実は関東と関西では少し違うのは知ってますか？関東ではエスカレーターの右側を急ぐ人のために開ける習慣になっていますが、関西ではその逆なのです。エスカレーターの片側を空ける習慣が始まったのは、戦時中のロンドンの地下鉄で、戦時態勢の中、効率よく人を運ぶために始まったと言われており、日本では約５０年ほど前に、阪急電鉄が梅田駅で呼びかけたのが最初と言われています。
障害をもっている人の視点に立って考えた時、左手が不自由な人ならば右手で手すりを持つだろうし、当然その逆も起こりえます。
あるいは、高齢になると身体のバランスが悪くなり、若い人が勢いよく横をすり抜けられると怖いと感じることもあります。実際に若い人からすれば軽く肩が当たっただけに思えるようなことでも、高齢者がその反動でこけてしまったという事例がたくさんあります。
そう考えると、「エスカレーターは立ち止まって乗る」ということの意義はわかりますが、その部分の是非を疑問に感じているのではなく、そんな条例を作らなければならない世の中になってきていることに、疑問を感じざるを得ないのです。
今日本は新型コロナウイルスによる感染拡大により、非常事態宣言が出された都府県もあり、大変な状況です。それでもインド等の諸外国に比べれば、いわゆる強い強制力を働かせるロックダウンではなく、「お願いベース」の自粛要請であっても、それなりに感染数を抑えられているのは、日本の文化がベースであろうとも思っています。しかしながら一部の若い人たちの間では、自粛など毛頭考えていないという様子で、路上飲みをしたり、闇営業をしている店で夜遅くまで騒いだりという光景をメディアでよく目にします。その部分を考えた時に、先ほどのエスカレーターの条例制定の背後に隠されたものに、重なってしまうのです。
以前ならば、マナーや常識、あるいはコミュニケーションによって対処・解決してきた問題を、法律や条令で規制するしかなくなってきているという動きがあるのではないでしょうか。法律や規則がどんどん増える世の中がいい方向に向いているとは決して思えないのです。
いわゆる、「許可された事以外はしない」の裏に隠された、「禁止されたこと以外は何をしてもいい」という怖さです。
「自分は若いから重症化はしない」「かかっているかどうかなんて、無症状だし」という自分本位での物の見方しかできない状態が多くなってきている証拠なのではないかと思うのです。「自分は無症状でも、ウイルスを拡散させているかも知れない」「既往歴のある人や高齢者の人にうつしてしまうかも知れない」という普通ならばそう思うであろう文化が薄れてきているのではないでしょうか・・・
「白井　聡さん」という政治学の先生がおっしゃっていますが、「共同性の崩壊」がそこにはあるそうです。自由主義化が進み、終身雇用による安定や地域社会のつながりなどが失われ、その代わりに宿命的に個人主義化が伴ってきます。「結果」は自己責任になり、他者は自分の「自由」を侵害する存在、自分を蹴落とす競争相手となっているのです。その結果、周囲と歩調を合わせて生きてきた今までの社会から、指示のみに従い、指示のない事柄については何をしてもいい、あるいは何もしないと判断するのが合理的と考えてしまうようになるのです。
学校にも校則があります。昨年は生徒会役員が中心となって服装の部分の校則を改定しました。校則にも、世の中の移り変わりによって変えて行くべき内容もあるので、そのことに疑問を持ち、考え、行動できたことは喜ばしいことであり、大きな成長だと思っています。私自身は、人が人を思いやり、集団生活でのマナーやモラルをしっかり考えることができれば、校則は必要最低限しか決めないようにするのが理想だと思っています。そんな学校や社会を取り戻すためには、今何が欠けているのでしょうか。地域づくりや社会教育活動などの「共同性」や「協働性」の基礎となるような事に力を発揮し、身近な人と話し合い本当の意味での民主主義を少しずつ取り戻して行くしかないのかも知れません。
少なくとも、辞書のような分厚い「規則」を持ち歩かなくてはならないような学校にはしたくありません。まずは教師と保護者からでも手をつないで、子どもの成長のために頑張ることから始めましょう。子どもがつまずいた時に、学校は「家での保護者の責任だ」と言い、保護者は「学校の先生は何をしているんだ」と言い合うような関係ではなく、お互いが子どもの成長を願い、未来の良き大人になるためのサポートをしたいものです。街づくりは人づくりであり、人をつくることができるのは教育であると思っています。